

解題

森本淳生

一橋大学大学院言語社会研究科では、「Hitotsubashi International Fellow Program」及び筆者の「一橋大学個人研究支援経費」により、フランス国立東洋言語文化大学 (INALCO: Institut National des Langues et Civilisations Orientales) 日本言語文化学部教授・日本研究センター所長のアンヌ・バヤール＝坂井先生をお招きして、二〇一〇年一月十八日に研究セミナー「谷崎潤一郎の小説における〈手紙〉」を、また一月二三日に表題のようなシンポジウムを開催した。

共同研究「生表象の動態構造」は、二〇〇七年度の研究科プロジェクト「オートバイオグラフィとオートフィクション——近代における〈私〉語りの変容」を引き継ぐかたちで構想され、二〇一〇年度からは科学研究費補助金の助成を受けて活動をさらに展開している。これは、狭義の自伝だけでなく、オートフィクションや、さらには民族学などで扱われるライフ・ヒストリーなども視野に収めて、とりわけ近代において人間の「生」が表象されるさいのさまざまな様態と力学を検討することを目的とするものである。筆者自身の視角は『言語社会』第三号に掲載してあるので、関心をお持ちの方は参照していただければ幸いである。

バヤール＝坂井先生はフランスの権威ある叢書であるガリマール社のプレイヤード文庫におさめられた谷崎潤一郎フランス語版著作集の翻訳者のお一人でもあり、昨今精力的に谷崎研究を進められている。日本語で読める最近の著作としては、岩波書店より刊行されている雑誌『文学』二〇〇八年九月一〇月号の特集「一人称という方法」に掲載された「暴露される一人称と小説の可能性」がある。また、二〇〇七年三月にフランス国立東洋言語文化大学で組織された谷崎に関する国際シンポジウムの成果を『谷崎潤一郎——境界を越えて』(笠間書院、二〇〇九年)として出版されてもいる。

『文学』所載の論文においては谷崎が一人称をさまざまに工夫しながら小説に活かしていることが具体的に論じられていて興味深い。芥川とのいわゆる「小説の筋論争」で谷崎が自己をそのままに書くことを批判し「うそ」の必要を説いた事実を枕に、

一人称は普通の人間の活動においては自然だが——「私」を使って話す——、「文学といったコード化された文化的活動の中ではこの一人称の語りというのは、誰かがわざわざ何かを誰かに向けて語る、といった装置を顕在化させ、それはまさに作爲的なものとして暴露される」(一〇六頁)ことを指摘され、この一人称の小説において顕在化する作爲性に谷崎がいかに対処したかを検討されていく。近代小説は「不特定多数の読者共同体に向けて発せられる」もの、「発信の場、状況にとらわれない書かれたもの」であるから(一一一頁)、一人称で登場人物が話したことは「書かれたもの」に変換されなければならぬ。谷崎はこうした近代文学の条件を、話し手がそのまま書き手になるというかたちによって(『痴人の愛』)、あるいは話の聞き手が書き手になるというかたちで(『世』や『盲目物語』)、小説的に可視化している。

先生によれば、近代小説とは私的言説空間に暴力的に侵入することによって成立するものである(一一四頁)。十八日のセミナーで主題とされた谷崎における手紙の多用や、『鍵』、『瘋癲老人日記』に見られる日記、手記・記録の使用は、そうした私的言説を公共空間へと暴きだす近代文学のもつ力学に基づくものであると言える。谷崎文学の面白さのひとつは、私見では、こうした近代文学の基礎構造を作品のうちに可視化させたことにあるように思われる。

「生表象の動態構造」と関連させて述べるなら、印刷技術から写真・映像技術にいたるまでの種々の表象技術は、十八世紀後半以降の近代世界に大きな変革をもたらしたはずなのだが、そのひとつに近代小説もあったと考えられる。行政的に各個人の情報が記録・管理され、政治活動は委細漏らさず記録されて文書館におさめられていくという、あらゆるものの「痕跡」を記録していくという近代の衝動は、植民地主義にもなって世界を支配した西欧の視線が他の諸民族を対象化し記録していった歴史と呼応しているようにも思われ、その大きな流れの中に、何気ない街角で起こる出来事や知られざる人間関係や密室で起こる事件を描きだす——多分に探偵小説的な——西欧近代文学もあったのではないかと考えられよう。その意味で、近代文学は知られざる秘密を貪欲に追い求め、それをパブリックな言説空間に吸い上げて表象するという力学に従っている。谷崎の文学はそうした力学に従いながらそれに対するメタ批評的装置を組み立てて、いわばこの力学を可視化しているように思われ、大変興味深い。

シンポジウムでご報告をお願いした社会学研究科の中野知律先生はマルセル・ブルーストを専門とされ、草稿の生成論的研

究を基礎としながら、文学史的・歴史社会学的な知見を加えつつ、ブルーストを中心としたフランス近代文学の本質に肉薄する論稿を数多く発表されている（『ジャン・サントウイユ』から『失われた時を求めて』へ——『書けない主人公の誕生』、『一橋大学研究年報 人文科学研究』第三七号、一九九九年）、『文学教養——十九世紀末フランスにおいて作家になるといふこと——』（『一橋大学研究年報 社会学研究』第四一号、二〇〇三年）、『〈書けない主人公〉の系譜学』（『言語文化』第四〇号、二〇〇三年）、『マルセル・ブルーストの修業時代』（『一橋大学研究年報 人文科学研究』第四三号、二〇〇六年）など。シンポジウムのテーマである主体とエクリチュールの関係について言えば、先生は、近代における「教養」のあり方を学校教育史なども踏まえつつ跡づけ、十九世紀後半に教養と書くこととの関係が大きく変化していったことを示したうえで、古典的な書物を読み、その中で書くという作家の伝統的な教養のあり方が不可能となる中で、ブルーストなど新しい世代の作家たちがいかにして書く行為へと到達しようとしたかを考察されている。また、世紀末に「書けない青年」を主人公とする小説——例えばジッドの『パリュード』を典型とするような小説——が多く書かれたことを指摘され、それらが、教養と書く行為とへの先鋭的な反省から生じたものであることも論じられている。『ジャン・サントウイユ』、『サントウイユ』、『ブーズに反論する』、種々のパステイッシュやラスキンの翻訳などから畢生の大作『失われた時を求めて』にいたる作品群は、以上のような世紀後半以降の大きな流れに対するブルーストの批評的かつ創作的な試行錯誤の痕跡であった。

今回のシンポジウムでは、バヤール＝坂井先生に谷崎におけるフィクションとノンフィクションの関係についてお話いただき、それに関連するかたちで森本が、ポール・ヴァレリー読解を通じて小林秀雄が醸成させていった〈私小説論〉的な批評の内実について発表し、最後に中野先生に「マルセル・ブルーストの奸策——〈書けない主人公〉の誕生」と題したご報告をいただいた。中野先生からは今回の論集にはレミ・ド・グルモンの『シクステイヌ』を中心にして問題をさらに展開した論攷をお寄せいただいた。三本の論攷はいずれも、現実と虚構、生とエクリチュールとが近代文学においてどのような関係づけられ、あるいはどのように混淆しながら展開していったのかを跡づけることで、「生表象」の問題を近代文学研究の側から明らかにしようとするものである。バヤール＝坂井先生の結論的な文章を引くならば、それは例えば次のようなことであった。「ノンフィクションの文章を通して、フィクションの意義、価値、重要性を強調しているわけで、ノンフィクションの

文章をもって、自分史と文学のストーリー化の同化を完結させていることになる。」

なお、十八日にはポール・ヴァレリーと精神分析批評を専門とされる山田広昭先生（東京大学大学院総合文化研究科）に、また二三日には中国近代文学を専門とされる坂井洋史先生（言語社会研究科）にそれぞれコメントーターをお願いした。お忙しい中、快くお引き受けいただいた両先生に感謝したい。